

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2008～2010

課題番号：20330159

研究課題名（和文） 教育における「力」の概念に関する学際的研究

研究課題名（英文） Interdisciplinary survey on the concept of “competence” in Education

研究代表者 今井康雄 (IMAI YASUO)

東京大学大学院・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：50168499

研究成果の概要（和文）：

1. 教育における「力」の概念の歴史的展開は、近代における「力」の哲学的対象化、新教育以後における「力」の経験的研究、1990年代以後の教育の中核的枠組みへの「力」の進出、という三つの局面に分節化して捉えられる。
2. 「力」という事象は、「力」概念の潜在性という特質ゆえに、実証的研究によっては解明されない側面を持つ。こうした側面は、「力」の対立概念たる「障害」の社会的構築性とも関連している。
3. 「力」を個人に帰属させるのではなく共同的なものとして捉える見方、「無力(～できない)」状態を積極的可能性として捉える見方が、教育のなかで「力」を考える上では重要である。

研究成果の概要（英文）：

The main findings and insights acquired through our project can be summarized in the following three points:

1. The historical development of the educational concept of “competence” can be divided into three phases: (1) philosophical thematization of “competence” as something plastic in the modern era, (2) empirical and practical investigations into “competence” in the age of progressivism (*éducation nouvelle*, *Reformpädagogik*), and (3) advancement of “competence” into the central framework of education from the 1990s.
2. Because the concept of “competence” has the unique characteristic of latency, phenomena concerning “competence” have aspects which cannot be fully elucidated through empirical investigations. Such aspects are intrinsically related to the social constructedness of “disability,” which can be seen as the opposite of “competence.”
3. In order to consider the concept of “competence” in education, the following perspectives are important: understanding “competence” as something not intrinsic to the individual but situated in interaction, and seeing “in-competence” as productive possibility.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	4,100,000	1,230,000	5,330,000
2009年度	5,400,000	1,620,000	7,020,000
2010年度	4,500,000	1,350,000	5,850,000
年度			
年度			
総計	14,000,000	4,200,000	18,200,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：能力観／教育哲学／教育政策／科学史

### 1. 研究開始当初の背景

書店には「力」という書名があふれている。内閣府の「人間力戦略研究会報告書」(2003年)、経済産業省の「社会人基礎力育成のススメ」(2007年)に見られるように、「力」という言葉は広義の教育に関わる政策提言にも浸透している。こうした「力」の氾濫は、単なる流行現象であるにとどまらず、教育を支える社会的条件の構造変化と結びついているように思われる。ポスト・フォード主義的な労働環境では、特定のスキルを持つことよりも、臨機応変に状況に対応したり人間関係を調整したりできるような人格特性が評価される。1980年代以後の日本の教育政策は、特定の知識を持つことよりも知識を情報として活用する情報活用能力を教育目標に掲げてきた。特定の領域や対象を持たない形で人間の中に想定された「力」が、教育の焦点として浮上してきているわけである。ところが、「力」という言葉が頻繁に使われ、教育をめぐる議論の焦点として浮上しているにもかかわらず、この「力」という言葉を使うということが何を意味するのかについての理論的な考察はほとんど見られない。「力」は、言わば虚焦点のように教育をめぐる議論を支配しているのである。このことが、教育論の混迷と空洞化—自分が何について語っているかを知らぬままに語り続けてしまうという事態—を、もたらす一因になっているのではないだろうか。「力」の重層的な文脈を明らかにし、現代の実証的な人間研究・社会研究へと架橋することが、教育をめぐる議論を適切に方向づける上で極めて重要だと思われるのである。

### 2. 研究の目的

本研究(「教育における「力」の概念に関する学際的研究」)は、教育をめぐる議論に広く深く浸透しているものの極めて多義的で曖昧な「力」という概念を、教育哲学・教育社会学・倫理学・科学史・言語心理学・発達脳科学といった学際的な観点から検討することによって、教育における「力」概念のA.含意、B.根拠、およびC.位置価を解明することを目的とする。つまり：

A. 「力」という概念は歴史的に見てどのようにして教育をめぐる議論のなかに登場してきたのか、そして、どのような意味内容がこの概念には付与されているのか、

B. 「力」という概念はどのような(どの程度)の実証的基盤を持つのか、

C. 「力」が教育論の焦点となるという事態はどのような歴史的・社会的・政策的背景を持つのか、そして、この概念をどのように理解

し位置づけることが教育をめぐる議論にとって適切であり妥当なのか、を解明しようとするものである。

### 3. 研究の方法

A. 「力」概念の含意を解明するためには、(a) 通時的な研究と (b) 共時的な研究が必要である。

(a) 前者は思想史的・科学史的な研究の形をとる。「力」の概念が、(a-1) 教育思想史の系譜のなかでどのように展開されたか、(a-2) 哲学・生物学における生気論的な思想のなかでどのように展開されたか、を解明する。

(b) 後者は概念分析的な研究の形をとる。日本語の「力」という言葉には、ability, capacity, capability, competence, potential, power, force, virtueといった様々な概念が流入している。シェフラーによる概念整理(Scheffler 1985)が一応の手がかりとなるが、近年の厚生経済学や社会倫理学における議論を参照しつつ「力」をめぐる概念地図を描く。

B. 上の通時的・共時的な研究は、「力」概念の実証的根拠を検討するための前提となる。学際的な議論が往々にして行き詰まるのは、自然科学と人文科学の間で概念の精粗の差が著しいことに一つの原因がある。本研究には発達脳科学と言語心理学の研究者が参加するが、通時的・共時的な概念整理によって生産的な議論のための前提がある程度整うことが期待される。人間の「力」に深く関わる上記分野の最先端の研究成果を議論の場に持ち込むことで、一方で「力」という概念の不明確で曖昧な部分をあぶり出すとともに、他方では人文科学的な概念を実証的人間研究に生かす可能性を探る。

C. 「力」概念の位置価を特定する上では、人間の「力」(pouvoir)の統制・強化に近代的統治の特質を見るフーコーの理論が重要な準拠になるが(Foucault 1975)、具体的な状況に照らしてそれを相対化することも必要である。(a) 現代の教育政策・労働政策や青少年の実態に関する実証的・臨床的知見と、(b) 正義論・公共性論といった規範的理論とを交錯させることで、現代の教育論のなかでの「力」概念の位置と役割を解明する。

### 4. 研究成果

「研究成果の概要」で述べた知見は以下のような研究会、シンポジウムなどを通して得られた成果である。

第1回研究会

2008年5月31日

場所：東京大学教育学部  
今井康雄(東京大学)「現代日本の教育論における「力」の位置」  
小玉重夫(東京大学)「有能であることと無能であること：学力論の組みかえに向けて」  
田中智志(山梨学院大学)「成長における自由と不安——フーコーの力とハイデガーの存在」

#### 第2回研究会

2008年7月26日

場所：東京大学教育学部  
川本隆史(東京大学)「共生力」って何なの？——《力=ちから》概念を脱・集計化するために」  
宮寺晃夫(筑波学院大学)「開発論から分配論へ——能力の教育政策の立脚点をもとめて」

#### 第3回研究会

2008年9月27日

場所：東京大学教育学部  
針生悦子(東京大学)「子どもの言語獲得」  
小原一馬(宇都宮大学)「老人力・質問力・鈍感力—90年代後半以降の「〇〇力」造語の分析」

#### 第4回研究会

2008年12月20日

場所：東京大学教育学部  
多賀徹太郎(東京大学)「力学—ちからの科学と人間発達」  
本田由紀(東京大学)「教育(学)は労働市場との接続問題を回避しうるか」

#### 第5回研究会

2009年1月31日

場所：東京大学教育学部  
広田照幸(日本大学)「メリトクラシーを疑う」  
木村拓也(長崎大学)「総合的かつ多面的な評価」の科学的根拠を問い直す」

#### 国際シンポジウム

「家庭教育・就学前教育の日独比較——課題と展望」

2009年2月28日

場所：東京大学教育学部

セッション1：父親

Kim-Patrick Sabla (Universität Dortmund)

「青少年福祉の担い手としての父親

セッション2：就学前教育制度の改革

Uwe Uhlenhorff (Universität Dortmund)

「ドイツにおける就学前教育—伝統と改革努力」

青木美智子(東京大学大学院生)「日本における就学前教育改革と保護養育観の変化—「認定子ども園」の課題」

セッション3：家庭と暴力

Nicole Rosenbauer (Universität Dortmund)

「ドイツにおける児童虐待とその防止」

小玉亮子(お茶の水女子大学)「日本社会における暴力・家族・子ども」

#### 研究合宿

2009年3月5日～6日

場所：KKR 鎌倉

竹内章郎(岐阜大学)「「能力の共同性」論への諸視点—発端と形成途中の経過」

堤孝晃(東京大学大学院生)「教育・社会と能力をめぐる二項図式」

田村謙輔(東京大学大学院生)「読み書きが「能力」として語られるとき—芦田恵之助の教育思想の生成とその受容」

#### 第6回研究会

2009年6月6日

場所：東京大学教育学部

白岩等(筑波大学附属小学校)「子どものわかりと子ども力」

市川伸一(東京大学)「岡山での学力・人間力育成推進事業とその周辺」

#### 第7回研究会

2009年7月11日

場所：東京大学教育学部

斉藤直子(京都大学)“Why language matters: Cavell's ordinary language philosophy and an alternative route to citizenship”

Richard Shusterman(Florida Atlantic University) “Somaesthetics and Performance”

通訳 樋口聡 (広島大学)

#### 第8回研究会

2009年11月7日

場所：東京大学教育学部

小玉重夫(東京大学)／中野浩(東京大学大学院生) 広田照幸著『ヒューマニティーズ 教育学』をめぐる

金森修(東京大学)／関根宏朗(東京大学大学院生) 田中智志著『教育思想のフーコー 教育を支える関係性』をめぐる

#### 国際シンポジウム

「グローバル化の時代における教育と言語・再考」

2009年12月10日

場所：東京大学教育学部

Paul Standish (London University)

‘Nothing is hidden’: Wittgenstein, transparency, and the limits of language

今井康雄(東京大学) Why does language matter to education?: Comparing

Nietzschean and Wittgensteinian Answers  
斎藤直子（京都大学） American  
transcendentalism and ordinary language  
philosophy: Stanley Cavell and philosophy  
as the education of grownups

#### 第9回研究会

2010年2月13日

場所：東京大学赤門総合研究棟  
安藤寿康(慶應義塾大学)「<ちから>の遺伝的  
実体性と有用性-進化教育学的試考」  
河野哲也(立教大学)「<拡張した心> 概念の教  
育への応用」

#### 第10回研究会

2010年7月31日

場所：東京大学教育学部  
小松佳代子(東京藝術大学)「美術が育てる力  
についての断想-トピカ・構想力・遂行的イ  
メージから考える」  
松下佳代(京都大学)「<新しい能力> 概念の系  
譜-2つのコンピテンシーをめぐって」

#### 第11回研究会

(バリアフリー教育開発研究センターと共催)

2010年10月9日

場所：東京大学教育学部  
田中智志(東京大学)／藤井薫(東京大学研究  
員) 金森修著『<生政治>の哲学』をめぐっ  
て  
星加良司(東京大学)「社会的障害(disability)  
にみる能力概念の再編成」

#### ワークショップ

(バリアフリー教育開発研究センターと共催)

「エヴァ・キティ『愛の労働』をめぐって」

2010年11月12日

Eva Kittay(New York State University)

山根純佳(山形大学)  
岡野八代(同志社大学)  
川本隆史(東京大学)

#### 国際シンポジウム

(バリアフリー教育開発研究センターと共催)

「人と人とのバリアフリー」

2011年2月19日

場所：東京大学福武ラーニングシアター  
基調講演：石川准(静岡県立大学)「バリアフ  
リーの政治：書籍のアクセシビリティ問題を  
手掛かりに」  
パネルディスカッション 1： Disability and  
Identity  
Karen Nakamura (Yale University)  
“Sexuality and Disability- from an  
Anthropological Perspective”  
星加良司(東京大学)「障害アイデンティティ  
を越えるとは？：社会学的視点から」

モデレータ 今井康雄(東京大学)

パネルディスカッション 2： Barrier-Free  
and Expression

貝谷嘉洋(NPO 法人日本バリアフリー協会代  
表理事)「音楽コンサートを通して障がい者を  
支援する」

Gunnel Backenroth-Ohsako(Stockholm  
University)「音のない世界を生きる人々の支  
援」

モデレータ 下山晴彦(東京大学)

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に  
は下線)

〔雑誌論文〕(計13件)

1. 川本隆史「地異に臨む社会倫理学へ——  
震災、ケア、正義をめぐる断想」『臨床精神  
病理』(82), 2011, 1-4 (査読なし).
2. Imai, Yasuo, Responsibility and  
Judgement, for What?, *Proceedings of the  
4<sup>th</sup> International Symposium between the  
Graduate School of Education,  
KyotoUniversity (Japan) and the Institute  
of Education, University of London (UK)*,  
2011, 27-33(査読なし).
3. 小玉重夫「教育における労働の脱規範化  
へ向けて-アレントによるマルクスの読み  
かえに着目して」『教育哲学研究』(101),  
2010, 44-51(査読あり).
4. 多賀巖太郎「発達と創発」『計測と制御』  
(38), 2009, 47-52(査読あり).
5. 針生悦子「対称性, 条件性弁別課題, そ  
して言語獲得」『認知科学』16(1), 2009,  
138-141(査読あり).
6. 小玉重夫「教育における遂行中断性・序  
説」東京大学大学院教育学研究科教育学コー  
ス『研究室紀要』(35), 2009, 1-8(査読なし).
7. 小玉重夫「シティズンシップ教育の実践  
的課題-小学校におけるシティズンシップ  
教育」お茶の水女子大学附属小学校『児童教  
育』(19), 2009, 12-19(査読なし).
8. 今井康雄「言語はなぜ教育の問題になる  
のか」『教育哲学研究』(100 記念号), 2009,  
221-242(査読あり).
9. 今井康雄／田中智志／田村謙典／北原崇  
志／広田照幸「教育における「力」の概念」  
『近代教育フォーラム』(18), 2009,  
189-202(査読あり).
10. 小玉重夫「教育改革における遂行性と遂  
行中断性-新しい教育政治学の条件」『教育  
学研究』76(4), 2009, 14-25(査読あり).
11. Maguire, M. J., Hirsh-Pasek, K.,  
Golinkoff, R. M., Imai, M., Harvu, E.,  
Vanegas, S., Okada, H., Pulverman, R., &  
Sanchez-Davis, B., A developmental shift

from similar to language specific strategies in verb acquisition: A comparison of English, Spanish, and Japanese, *Cognition*, 114(3), 2009, 299-319(査読あり).

12. 田中智志「完全性と力——重層的な力の概念史の試み」山梨学院大学大学院社会科学研究所 『研究年報 社会科学研究』(30), 2009, 3-21(査読なし).

13. Harvu, E., Imai, M., & Okada, H., Object similarity bootstraps young children to action-based verb extension, *Child Development*, (82), 2009, 674-686(査読あり).

〔学会発表〕(計 10 件)

1. 今井康雄「メディアと国語と教育——メディア論の二つの系譜から考える」全国大学国語教育学会大会, 2010 年 10 月 31 日, 鳴門教育大学.

2. 今井康雄/河野哲也/松丸啓子「心の哲学と「力」の概念」教育哲学会大会, 2010 年 10 月 17 日, 中央大学.

3. 川本隆史「ケアリングと正義の教育——cura personalis と renovatio mundi の統合を目指して」日本カトリック教育学会大会, 2010 年 9 月 4 日, 清泉女子大学.

4. 児島博紀「J. ロールズのメリトクラシー批判」日本教育学会大会, 2010 年 8 月 21 日, 広島大学.

5. 堤孝晃「「学力問題」へのリスク社会学からのアプローチ」日本教育学会大会, 2010 年 8 月 22 日, 広島大学.

6. 田口賢太郎「力をめぐる時間と瞬間—ジョルジュ・バタイユの「瞬間」概念に注目して」日本教育学会大会, 2010 年 8 月 22 日, 広島大学.

7. 川本隆史「子ども・ケア・共生——社会倫理学の螺旋運動」第 50 回日本児童青年精神医学会総会, 2009 年 10 月 1 日, 国立京都国際会館.

8. 広田照幸「能力主義と公共性の問題—能力主義を飼い馴らす」シンポジウム「メリトクラシーと公共性」(司会: 小玉重夫、指定討論: 今井康雄), 2009 年 8 月 28 日、東京大学.

9. 金森修「エンハンスメントの哲学」国際公開シンポジウム『人間改造のエシックスブレインマシンインターフェースの未来』, 2009 年 1 月 14 日, 京都大学.

10. 今井康雄、田中智志、田村謙輔、北原崇志「教育における「力」の概念」教育思想史学会第 18 回大会, 2008 年 9 月 12 日, 奈良女子大学.

〔図書〕(計 13 件)

1. 金森修「〈生政治〉の哲学」ミネルヴァ書房, 2010(339 頁).

2. Imai, Yasuo, "Die Medien und die „Repräsentation“ . Unterwegs zu einer pädagogischen Semantik der Medien", in: Cornelia Dietrich / Hans-Rüdiger Müller (Hrsg.): *Die Aufgabe der Erinnerung in der Pädagogik*, Klinkhardt 2010, 299-312.

3. 金森修『ゴーレムの生命論』平凡社, 2010(221 頁).

4. Kanamori, Osamu, "L' évolution créatrice et le noe-lamarchisme", in: Arnaud Francois ed., *L' évolution créatrice de Bergson*, Vrin 2010, 111-123.

5. 小玉重夫『『無能』な市民という可能性』, 本田由紀編『転換期の労働と〈能力〉』大月書店, 2010, 194-204.

6. 針生悦子「子どもの言語獲得」, 重野純編『言語とところ』新曜社, 2010, 59-83.

7. 針生悦子「言語力の発達」, 市川伸一編『発達と学習』北大路書房, 2010, 28-53.

8. 田中智志『教育思想のフーコー——教育を支える関係性』勁草書房, 2009(259 頁).

9. 田中智志/今井康雄編著『キーワード現代の教育学』東京大学出版会, 2009(277 頁).

10. 広田照幸『ヒューマニティーズ 教育学』岩波書店, 2009(148 頁).

11. 田中智志編著『グローバルな学びへ—協同と刷新の教育』東信堂, 2008(234 頁).

12. 金森修編著『エピステモロジーの現在』慶應義塾大学出版会, 2008(500 頁).

13. 川本隆史『共生から』岩波書店, 2008(153 頁).

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

今井康雄 (IMAI Yasuo)

東京大学・大学院教育学研究科・教授  
研究者番号: 50168499

### (2) 研究分担者

金森修 (KANAMORI Osamu)

東京大学・大学院教育学研究科・教授  
研究者番号: 90192541

川本隆史 (KAWAMOTO Takashi)

東京大学・大学院教育学研究科・教授  
研究者番号: 40137758

小玉重夫 (KODAMA Shigeo)

東京大学・大学院教育学研究科・教授  
研究者番号: 40296760

広田照幸 (HIROTA Teruyuki)

日本大学・文理学部・教授  
研究者番号: 10208887

(3) 連携研究者

多賀巖太郎 (TAGA Gentaro)

東京大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：00272477

田中智志 (TANAKA Satoshi)

東京大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：80265967

針生悦子 (HARYU Etsuko)

東京大学・大学院教育学研究科・准教授

研究者番号：70276004